

科目「日本語を考える」授業実践案

—保育者・教育者に求められる国語力の習得に向けて—

山崎 潔

YAMASAKI Kiyoshi

本稿は、本年度の科目「国語」担当として試みた授業実践を振り返りつつ、次年度の科目「日本語を考える」の授業実践にあたり有用と考えられる方法について考察することを目的としたものである。

科目「日本語を考える」は文章を読み、鑑賞し、批評し、表現について考え、自らの表現に活用することを目標とする科目である。ここでは次代の文化や感性の担い手である子どもたちに接する保育者、教育者として求められる国語力の習得に向けての指導法の一つとして、フィードバックのための双方向コミュニケーションを成立させることを目指した指導法について考察し、その有用性を再確認したい。

キーワード： 国語力、理解、鑑賞、批評、フィードバック、コミュニケーション

1. はじめに

各人の「コミュニケーション能力」が社会から求められ、人物評価の項目とされるようになってから久しい。特に集団生活を送る中にあるのは、常に人物評価の重要な項目の一つとされる。

平成20年3月の保育所保育指針第2章子供の発達—2発達過程(4) おおむね2歳「語彙が著しく増加し、自分の意思や欲求を言葉で表出できるように」なり、同(5) おおむね3歳「話し言葉の基礎ができ」、「質問するなど知的興味や関心が高まる」とある。

この時期が、言葉による相互コミュニケーションの萌芽期であろうが、コミュニケーション能力の発達にとって、とりわけこの時期以降の数年間に子どもと接する保育者、教育者の果たす役割の大きさは言うまでもない。

自らの思いを他に伝え、他の思いを受け取ることができる能力をもってはじめて社会生活、集団生活が成立するのである。うまく伝達できるか否かによって、個人の社会生活の成否が大きく影響されてしまう、といっても決して過言ではあるまい。であればこそ、この相互コミ

ュニケーションの萌芽期から、そのときを意識して準備することができれば大きなアドバンテージを得ることができるのである。

その伝達的手段としてまず挙げられるものが言葉である。日本語である。

正しい、美しい、豊かな日本語を子どもたちになじませるためにも、それを扱うことができる国語力が、感性が、保育者、教育者には求められている。

もちろんのこと、われわれが求められる「コミュニケーション能力」とは言葉を媒介とした単なる伝達能力だけでは決してないであろう。むしろ、言葉では伝達されない「場の雰囲気を感じ取る能力」や「周囲の期待を読み取り、協調して共同で作業を行う能力」の意味で使用される場合も多い。この場合、われわれは周囲の状況から、言葉に表されていないものまでを読み取り、理解、実践しなければならないことは明白であり、それに応えられなければならない周囲に受け入れられない、ということになる。

実は、このようなこともわれわれの感性、文化の特質の一面であり、そういった感性、文化が伝統として前世代から受け継がれ、次代に受け継いでゆかれる。そして、

この代々にわたって受け継がれてきた感性、文化こそが、この国に住む人々の特徴、本質に関わるものである。

ところで、言葉に表されていないものを読み取るには、観察に基づく推測と、過去の経験から導く類推によるしかない。いずれも「論理的な思考力」によって成立するものであり、このとき、われわれが社会から求められているものは「思考力」に他ならない。

とすれば、どうすれば子どもたちに思考力をつけ、より高めるためのサポートができるのであろうか。

それには、あらゆる思考は言葉によってなされるものであり、言葉がなければ思考することにも支障を来す、ということ意識して、保育者、教育者自身が国語力を、日本語力をより高め、子どもたちに接することで子どもたちに日本語について興味を持たせることである。

正しい、豊富な語彙力がより柔軟な思考を助け、また、そうして築き上げた新しい思考が新しい言葉を生み出す。

ということは、特徴的な言葉は特徴的な思考を表すものであり、特徴的な感覚を表すものであろう。

すなわち、日本語は日本の歴史、文化、伝統、本質、感性を醸成するものであり、同時にそれらを表出しているものである、ということをも日本語の中で生活するものとしてまず保育者、教育者をめざす学生たちが理解する必要がある。そうして、その理解の上で日本語になじみ、取り組むことで日本語力を高め、その高められた日本語を活用することで、彼らと接する次代の子どもの感性はより豊かなものとなる。それがとりもなおさず、子どもたちが特徴的な思考をなすことにつながり、伝統的な文化の継承にとどまらず、新しい文化の創造さえなし得る、と考える。

そこで、次に学生がいかにすれば日本語力を高めることができるかを具体的に考察してゆきたい。

2. 方法 (授業展開の案)

科目名：

日本語を考える

目標：

- 文章を読み、批評し、表現について考える。
- 文学作品や論評、随筆、歌詞など、いろいろな種類の「日本語表現」の作品に触れる。

○それらが、どのようにして心を伝え、心を動かすのかを考え、自らの表現に役立てる。

概要：

- 各ジャンルの作品について読解し、鑑賞、批評する。講義と討論。
- 毎回自分の意見、感想をまとめて提出する。
- 口頭発表を設定する。

全体の授業計画：

- | | |
|-------|---------------------------------------|
| 1～2 | ガイダンス・起源・成立
多言語との比較
時代や伝統、文化の影響 |
| 3～5 | 小説 |
| 6～7 | 詩 |
| 8～9 | 俳句・短歌 |
| 10～12 | 随筆・コラム・新聞記事 |
| 13～14 | 歌詞 |
| 15 | まとめ |

3. 考察と課題

本科目の目的の一つとして、社会人として、教育者として身につけるべき国語力を向上させるということが挙げられることを常に視野に入れて考えたい。

a 興味付けの重要性

まず、第1時のガイダンスであるが、何よりも学生に興味を持ってもらうことを主眼に置きたい。

学生の国語力に関して検討してみると、考察、理解、表現の基礎となるべき語彙力や、国語常識とも呼ばれる内容に関する知識量という点において、その個々の差が

顕著であり、しかも、その分布が幅広く展開しているのが現状である。

本年度、本職が担当した科目「国語」内で実施した到達度確認のためのテストにおいても、得点分布の幅が大きく、特に書簡様式や慣用表現に関する問題にその傾向が顕著に見受けられた。

表一 課題到達度確認テスト 正答率分布表
(2016年度実施 科目「国語」受講生 1回生 28名)

問 題	書簡様式等の 国語常識	用字・用語 慣用表現	敬語の使用
90%以上	1	3	6
80～89%	5	6	8
70～79%	6	8	6
60～69%	5	4	2
50～59%	4	1	3
40～49%	2	3	2
30～39%	1	2	0
20～29%	2	0	0
10～19%	1	1	0
9%以下	1	0	1
平均正答率	61.35 %	65.36 %	72.98 %

日常生活上の必要とされる言葉遣い（敬語の使用法）や、伝達の際の様式（書簡様式等）というような今まで常識とされてきたことがらに対する習得の程度の個人差が目立つ。

近年の生活習慣の多様化により使用語彙に変化が見受けられることや、コミュニケーションツールの発達、変遷によってもたらされたことという面もあり、やむを得ないこととされるかもしれないが、社会を構成する人々の多様性や、言葉を使用する状況に応じた言葉遣いの使い分けの必要性を考慮するに、看過できないことである。ましてや、子どもたちを保育・教育する立場であれば、

使用する言葉遣いが、ただ特定の条件の人々に伝達が可能であればよし、とすることはできない。

自らが接する子どもたちが、いかなる時でも正しい、豊かな、美しい言葉遣いができるように保育、教育を心がけなければならないことは明白である。そのためにも学生が正しい知識を、豊富な知識をまず吸収しなければならない。

授業担当者として学生の知識吸収に対する助力をまず心がけるべきであろう。そのためには興味付けの意味でも、日本語の起源や成立過程に関する説をいくつか紹介することや、受け継がれてきた文化や慣習から生まれた言葉、文化や感性を象徴する言葉を意識的に取り上げる。また、他言語との比較を話題として取り上げたり、やまとことばや雅語、敬語法など、美しさを感じさせる語を積極的に紹介したりしながら、日本語についての興味をさらに深いものへと導く。

また、学生自らが収集し、知識化したものを定着させ、蓄積させるよう心がけさせることが求められる。語彙、表現、国語常識等の基本的事項に関してもその蓄積、定着状況を時折確認し、到達度に配慮する必要を認めるものである。

無論のこと、これら学生の蓄積した知識は、将来、学生が保育者、教育者になった際の素養となるという意味で有用であると思われる。

b 表現の実践例から学び、自らの表現法の参考に

次いで第2時からは様々なジャンル、時代の表現実践例を取り上げ、それらに内包する日本語の豊かさに触れ、どういう点に心動かされ、また、表現者の工夫がいかなるものであるか、などをテーマに鑑賞・批評を展開していく。

この際、各時代の背景の解説や、作者の置かれた状況なども参考に挙げることで理解の一助となり得ると思われるが、それらの知識を得る前後での作品理解、評価の変化等にも留意させたい。

そうすることで自らの表現の参考とすることができるのではないかと考える。

ただし、授業担当者の留意点として、この場合の教材は授業担当者が選定することが基本となるが、何を教材として選択し、また、どの程度の資料を、どれだけの分量を、提示するか、ということが課題点となる。

できうる限り偏らないものを選ぶことができれば最良ではあるが、実際には多少の偏りが出てしまうかもしれ

ない。

これらの点がこの方式の課題点であろう。

c 自主的な、積極的な参加をはかる

積極的な、自主的な授業参加をはかるためには、学生にグループを組織させ、グループごとに取り上げたい作品を挙げさせて、発表させるという形も考えられる。

発展形としてビブリオバトル(知的書評合戦)形式も導入が可能である。

この形式であれば、グループとしての共同作業や役割の分担、といった社会的協調性が養われ、人前での発表を経験することで積極性やプレゼンテーション能力の発掘、進展が期待できる。あわせて自己の主張を受け入れてもらうための努力の必要性や、他の言葉を受け入れる柔軟性をも養うことが可能となるばかりか、ディベート能力の習得へと展開、発展していく。

上述の方法はいずれも、授業担当者が避けなければならない、一方通行型の授業に終始してしまうことを、避けることが可能となるという一面を持つ。

また、毎時間、各自の感想、自分の意見をまとめさせ、記述させ、提出させることも双方向コミュニケーションへつなげることができる。

たとえば、毎時間、提出された学生のまとめ、感想に授業者がコメントを書き込み、次時に返却する。

これによって出欠席も同時に確認が可能で、出欠確認の時間を短縮できることもある。

また、授業者がコメントを書いて返却することによって、関連質問へと発展することもあろうし、誤解部分の指摘も考えられる。そうすることでフィードバックへとつなげることができる。

もちろんのこと、受講人数によってはかなりの授業担当者の負担となるであろうが、コメント欄の分量を工夫することなどで、対処が可能となるのではないかと考える。

もし、授業担当者に時間的余裕があれば、コメントにとどまらず、添削指導という方法が採ればベストだといえる。

文意、論旨の筋道、表現、誤字、誤表現、段落分け、文の構成、などについて添削指導を施して返却することができればいいと考える。

また、クラスの前で発表することも可能で、そうすることで他者の意見を聞くことができるという利点も発生する。他者の意見を確認して、自らの意見を補強、確立

するか、反して自らの意見を客観し、訂正変更するか、いずれにしても自らの考察を深めることに直結する方法である。

加えて、授業以外でも読書や映画鑑賞、芸術鑑賞を経験した際、読書感想文や報告文、もしくは紹介文の提出を課題としたい。前述のビブリオバトル(知的書評合戦)は口頭で行うが、これの文書版でも可能であるが、これを課題として提出させる。口頭であれば聴衆の反応を見て調整をしながら話を進めることができるという利点が生じるが、文章の場合は、読み手の反応を想像しながら論を進めなくてはならず、独りよがりの文では通用しないということを経験させたいと思う。

これに加えるものとしては、新聞の社説、コラムの筆写と要約の作成や、創作活動がある。

要約の場合は字数を変えて、たとえば、800字、400字、200字、100字、50字、タイトルをつける というような制約を課した上での要約を課題とする。

また、創作活動の場合は、小説、随筆、戯曲、詩歌 といったものを創作することを課題とするもので、ねらいは思考の手段としての言葉の扱いを体感することである。

いずれにしても、次代の子どもたちを導く立場にある学生にとって、言葉を使って説明、紹介・報告することをより多く経験することが、将来につながるものであることを認識させることができれば、学生の積極的、自主的参加を促すことができるであろう。

課題点として考慮しておかねばならない点は、時間的な制約であろう。創作活動はかなりの時間を要するものであり、長期休暇等の課題として扱うのがよいと考える。

これらは伝達手段の習得、錬磨にとどまらず、周囲のものを常に考察、思考の対象におき、自らの意見、感性を築き上げていく材料としてとらえる習慣を身につけることにつながる。

d 今後の課題

言葉とは伝達のための手段、道具という一面を再確認させ、より正確に他からの情報を理解し、また、他に対してよりの確に伝達できうる表現方法の習得のための国語力を身につけさせる。また、同時に、思考、考察の手段としての言葉に対する感性をより磨くために各人の国語力の向上をはかり、培った感性の発露による、新しい時代につながる思考力を身につけさせる。

正しい理解力、思考力に裏付けられた感性を発揮して文化を継承し、新しい文化を創造することのできる人材

を育成し、彼らが保育者、教育者となって次の世代の人材を育成していくことの一助となることができるような知識の研究の方法や、蓄積の手段や実践、錬成の機会の提供こそが本科目の目的である。

個人差が目立つ現状を鑑みた場合、限られた時間で国語力の個人差を考慮した、かつ、双方向のコミュニケーションが成立した、教材や課題の作成がなせるかという課題点に直面する。

もちろんのこと、それらの課題は学生にとって、実用的で、魅力的なものでなければならず、また、時代や社会が求める内容を網羅したものであり、学生が保育者、教育者となったとき、子どもたちのために新しい課題を提供できるノウハウが身につくものでなければならない、というかなり難度の高いものである。

具体的な教材や課題を考える場合、その作成は集団のレベルと個人差を考慮した、柔軟な選択と対応を必要とされるものとなるであろう、という課題点があげられる。

4. 引用文献・参考文献

- 文部科学省 (2008) 『幼稚園教育要領』
厚生労働省 (2008) 『保育所保育指針』
赤堀侃司編 (1997) 『ケースブック 大学授業の技法』
有斐閣
大野晋 (1999) 『日本語はどこからきたのか』
中公文庫
大野晋 (2002) 『日本語はいかにして成立したか』
中公文庫
荒木博之 (1983) 『やまとことばの人類学』
朝日選書

ピアスーパーバイザーからのコメント

本論文は、筆者が本年度担当した科目(国語)の授業実践を振り返りつつ、次年度の担当科目(日本語を考える)の授業実践案を考察したものである。次代を担う子どもたちの豊かな国語力を育むうえで、保育者・教育者の果たす役割は大きい。国語力の向上は、すべての授業科目に共通するテーマでもあり、自分の担当科目の中で何ができるか、あらためて問い直したいと思う。本授業実践案に基づく授業展開の実際をふまえての報告を期待したい。
(担当:岡崎公典)